

## トピックス&amp;オピニオン

レヴィ＝ストロースの料理構造論  
—料理の三角形から料理の四面体へ—

川端 晶子\*

Akiko Kawabata

20世紀を代表する思想家で「構造主義の父」といわれているフランスの文化人類学者、クロード・レヴィ＝ストロースは100歳で2009年秋に亡くなった。彼は「合理的でない」とされていた未開社会などの現象を、目の覚めるような明晰さで、実証的な方法を用いて分析した。

「料理の三角形」モデルとは何か。レヴィ＝ストロースは、「生もの」「火にかけたもの」「腐ったもの」を三つの頂点とする料理の三角形モデルを呈示した。図1に示すように、このモデルについて彼は次のように言っている。「(料理は)三頂点が《生もの》《火にかけたもの》《腐ったもの》の категория にそれぞれ対応するような三角形をなす意味の場の中に位置を占める一つの体系を前提とする」。

レヴィ＝ストロースが「《火にかけたもの》は《生もの》の文化的変形であり、これに対して《腐ったもの》は《生もの》の自然の変形である」と述べているように、「自然/文化」というレヴィ＝ストロースにおなじみの抽象度の高い二項対立が現れる。

構造分析の方法は言語学で先に確立されていたが、レヴィ＝ストロースは人類学における文化一般の研究にも、言語学と同じ厳密な科学的方法を適用することを試み、それが神話をはじめとする文化の構造分析の一つの出発点となっている。しかし、レヴィ＝ストロースが実際に展開した研究を見てもわかる通り、言語学の方法はむしろ比喩的に用いられており、同時に広汎な文化史的視野のなかで、異なる文化のあいだのモデルの変換という考え方が併用され

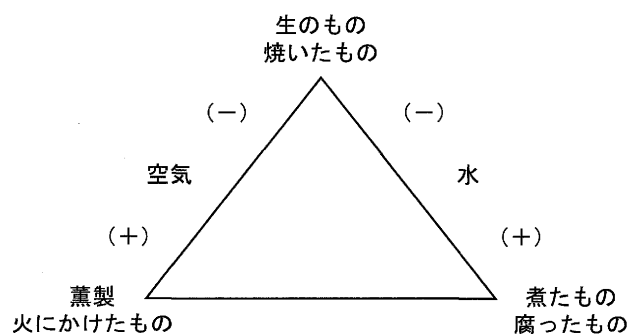


図1. 料理の三角形

資料：クロード・レヴィ＝ストロース「食卓作法の起源」, p.566, 渡辺公三他訳, みすず書房, 2008

て、文化の隠れた構造の解明に有効に働いている。

このように、レヴィ＝ストロースは青少年時代の第二次大戦前のヨーロッパで、地質学、精神分析、マルクス主義に影響を受けつつ精神的自己形成を行ない、ブラジル、ついでアメリカ合衆国で、ボアズ、クローバーをはじめとするアメリカ流の総合人類学の潮流に身を置いて、文化人類学者としての学問形成を果たすという、きわめてスケールの大きい、恵まれた環境で学問の基礎を作ったことになる。当時のアメリカで、ウィーナなどのサイバネティクス理論に接したことも、レヴィ＝ストロースの学問展開に独特な性格を与えているといえる。レヴィ＝ストロースは厳密を重んずる分析者であるとともに、博大な教養をもつヒューマニストであり、博士の学問は、まさに詩人の心と科学者の手、そしてヒューマニストの目が一つになった類いまれな例といえよう。

## (1) 料理の法則性を解析する媒体として

図2に示すように、三角形の底面の三つの頂点には、熱の媒体である水・油・空気をおき、残りの頂点には火（熱源）をおいている。火とそれぞれの頂点を結ぶ稜線を、水を媒体とする煮もののライン、油を媒体とする揚げもののライン、空気を媒体とする焼きもののラインと名づける。

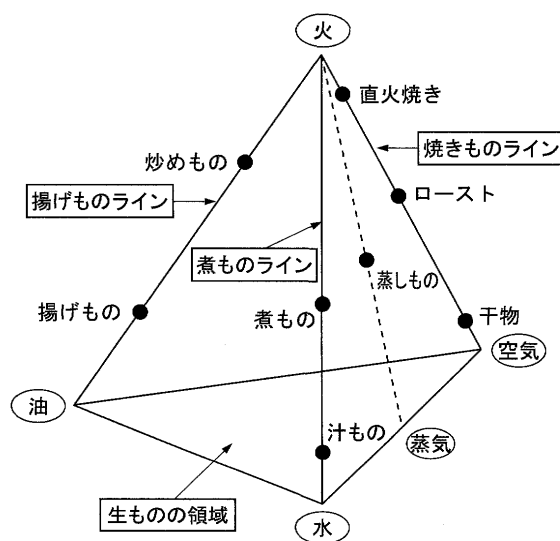


図2. 料理の四面体

資料：玉村豊男著、『料理の四面体』, p.183, 鎌倉書房, 1980 一部加筆。

\* 東京農業大学・名誉教授  
(Tokyo University of Agriculture)

それぞれのラインにおいて、火の頂点に近づけば、近づくほど火の介在する割合は高く、焼きものラインにとれば火に近いほうから、直火焼き、ロースト、干物の順となる。単一調理操作の料理は稜線上にのり、二つの操作の料理は二つの稜線ではさまれた面上に、また三つの複合操作の料理は四面体で囲まれた空間にスポットされる。底面は生も

の領域である。

## (2) 新しい料理創作の媒体として

何か一つの食材を、この料理の四面体のどこかの一点におくと、一つの料理ができ上がり、その点を移動していくと次々に新しい料理が生まれる。こうして、新しい料理創作の媒体として使うことができる。